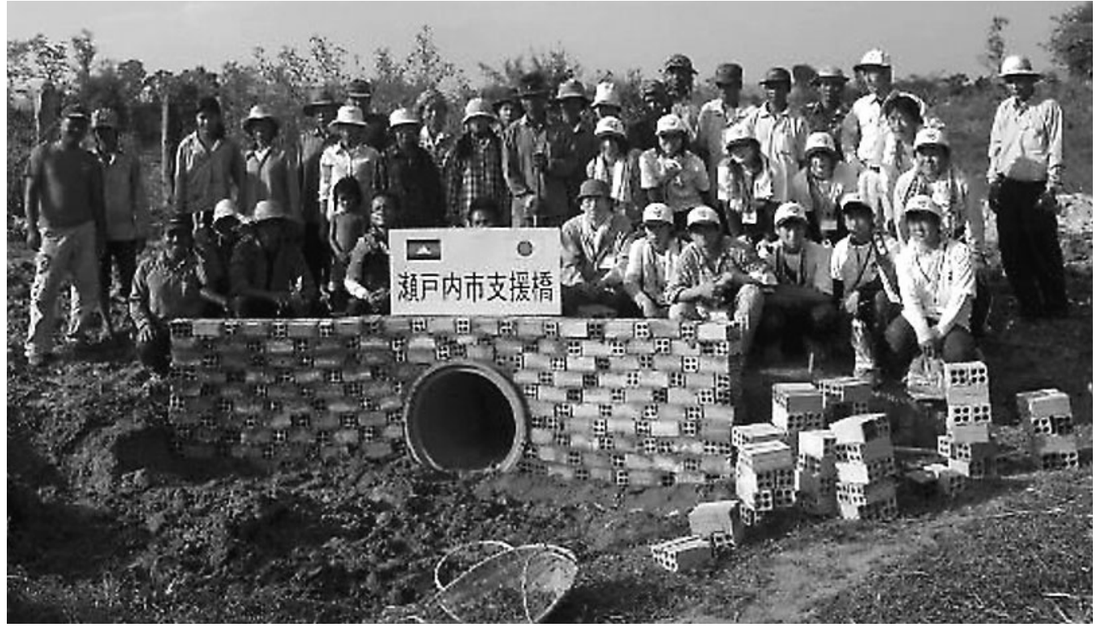
平和・命の尊さ・心の温かさを学ぶ
国際貢献カンボジア派遣事業

瀬戸内市在住の中学生・高校生ら10人が1月4～8日の5日間、市国際貢献カンボジア派遣事業に参加しました。事業の目的は、カンボジアの生活水準向上を目指した国際貢献活動をする中で、国際社会の一員として、自分たちに何ができるかを考え、ボランティア精神やグローバルな考え方を身に付けてもらうことにあります。参加した3人の感想を紹介します。（敬称略）



スケジュール

1月4日
市役所出発
カンボジア王国シェムリアップ着

1月5日
HIV/AIDS家族自立村・自立支援センターで見学・交流
アキラの地雷博物館見学
バンデアスレイ県オオモノ村で国際貢献活動

1月6日
バンデアスレイ県オオモノ村で国際貢献活動
CVSG現地事務所訪問

1月7日
アンコールトム、アンコールワット、トンレサップ湖（水上生活者）、キリング・フィールド見学
シェムリアップ発

1月8日
市役所着　帰国報告会

瀬戸内市支援井戸

市は、カンボジアに井戸を掘ってもらおうと、昨年11月のバルーンフェスティバルで募金活動を行い、また今回の参加者からも募金を募りました。合計金額は、85、000円。

1月6日、この貴重な募金を、CVSG JAPANカンボジアの村を支援する会（代表　村田みつおさん）に、現地で直接渡しました。

この募金で、シェムリアップ州の農村部に井戸が3基建設されます。そのうち1基は、募金活動開始とともに建設されたため、既に完成。この井戸は、「瀬戸内市支援井戸」と名付けられ、地元の人の生活に役立てられています。

現地の人と力を合わせ、クワで土を掘ります

縄跳びで交流。すぐに仲良くなりました

カンボジアの村を支援する会の村田さん（左）から説明を聞く参加者

国や言葉を超えた交流で感じた自分たちにできること、学ばなければいけないこと

井上　開貴（かいき）（14歳・長船町土師）

「ひとまわり大きくなってくるから行かせてやろう」と父。「でも、地雷もいたる所にあるし、食べ物だって心配でしょ」と母。そんな両親に見送られながら、僕たち「瀬戸内国際ボランティア隊」は1月4日にカンボジアに向けて関西国際空港を飛び立ちました。

そもそも、カンボジアという国を知っていますか？

正式名称は、「カンボジア王国」で、面積は日本の半分ぐらい。東南アジアのタイとベトナムの間にある人口1千万人ぐらいの国です。

そこで僕たち「瀬戸内国際ボランティア隊」10人は、道路が寸断され、物資の輸送が困難になっている農業用道路の整備（雨季になると水がたまってしまうところにヒューム管を埋める作業）を、現地の人々と共同で行いました。

カンボジアでは、雨季と乾季があります。僕たちが行ったときは乾季だったため、気温が30℃もあり、日本との温度差に戸惑いました。そんな中で、作業が始まりました。

まず、長さ10メートル足らず、幅1メートルぐらい、深さ1メートル弱の溝を、総勢30人ほどで汗だくになりながらクワで掘っていきます（なぜか現地にはスコップがなく、みんなクワを使いました）。

次に、それを大きなザルに入れて運びます。その重たいこと。水分を含んだ山盛りの土は、僕たちには普段あまり持つことのない重さでした。大体10キロくらいだったでしょうか。しかし、この土には10キロ以上の「重さ」がありました。それを何往復もして、やっとヒューム管を埋めることができました。ここまで、2日間掛かりました。宿泊所へ戻るバスの中では、皆くたくたで、でこぼこ道も気にならないほど眠っていました。

宿泊所では、日本で心配していた食事も思っていた以上においしく、ほとんど食べることができて一安心しました。特に、肉と果物がおいしく、たっぷり食べることができました。

人なつっこい現地の子

カンボジアに行って一つ驚いたことがあります。子どものことです。

僕と同じ14歳の子でも、20～30センチの身長差があったと思うし、10歳の子でも、日本の5歳の子どもと変わらないように見えました。犬や猫、牛などの家畜にいたっては骨格が丸見えで、栄養状態が悪いことは一目瞭然でした。

今回初めて日本を出て、日本との違いを感じ、その中でも、現地の人との国や言語を超えた交流に、現地の人のカンボジアにかける思いがひしひしと伝わってきました。

『国が違うと肌も違う。言葉も違う。経済大国の日本がこれから何をしてあげられるのだろうか。そして、何を学ばなければいけないのだろうか。僕たちのすることはまだまだある』